ラッキー♪

×あひる×

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラッキー♪

【Ｎコード】
Ｎ３９５４Ｄ

【作者名】
×あひる×

【あらすじ】
ある日突然、物凄く運が悪くなってしまった主人公。果たして、その理由とは何なのか？また、主人公の運勢は元に戻るのか？主人公を中心に起こる数々の災難を書きつつったコメディ―小説。是非、ご覧くださいｍ（＿＿）ｍ

プロローグ：「うん」（前書き）

初めまして×あひる×ですｍ（＿＿）ｍ。小説なんて書いたことがなく、読みにくかったりするかもしれませんが頑張って書きますので応援やアドバイスの方をよろしくお願いします。

プロローグ：「うん」

その日は俺にとって、人生史上最も運が悪い日だった。

朝、目覚まし時計が鳴り８時に起床。

ベッドからはい出て俺の部屋のカーテンを開けると、まだ四月になったばかりなのにもう夏なんじゃないかと思ってしまうほど燦々（さんさん）と照り付ける朝日。

「うわぁ、まぶしい～。」

今日も清々しい快晴であり、なんかいいことでもありそうだなぁ、とごく普通なしょうもない幸せを噛み締める俺。

そんな呑気（のんき）なことを考えていたせいか、さっそく一つ目のヘマをやらかす。

朝食を済ました後に歯を磨こうとして、歯みがき粉とヘアトニックを間違えてしまった。

口の中には尋常じゃ無いほどの爽やかさが広がっていった。

「息リフレッーシュ！」

「っとか言ってる場合じゃね～！！、死ぬ～～！」

すぐさま、口を２００回くらいゆすぎ口内を洗浄する

「ぐはぁー、死ぬかと思ったー、てか普通あの二つを取り違えることなんて有り得ねぇ！」

などと朝から一人ツッコミをする。

なんとか口内の革命が収まった後、

俺は制服に着替えて家を出発した。

外は、やはり春の陽気にしては少し度が過ぎてるくらいの暖かさで制服もさすがに冬服のままじゃ暑かったので上着を脱ぎ、適当に丸めて学校指定のスポーツバッグに詰め込んだ。

その時も、きっと俺はポカポカ陽気のせいでどこかぬけていたに違いない、せめてそれくらいの弁解はさしてくれ。

とにかく問題はタイミングと少しの悪意だったんだ。

はぁ、随分もったいぶってしまったな。

結果から言おう、登校中に俺は犬の糞を４回も踏んだ、そう踏んでしまったんだ。

その時の心情と状況を少し語りたいと思う。

一個目：友達としゃべりながら道を歩いていて……ぱすっ
（うわっ！ミスったこの靴まだ新しいのに！）

原因：俺の前方不注意

二個目：曲がり角を曲がった瞬間に車が飛び出してきたので咄嗟(とっさ)に道の端っこに避けたら……ぐちゃ
（うぉい！またかよ、くっそ～ついてねぇ～な～）
原因：間(ま)が悪かった

三個目：二個目を踏んでから一歩踏み出したら……ぐちょ
（思考停止中）
敗因：神の意思

四個目：三個目を踏んだ俺が、ただ呆然と佇ん（たたずん）でいると横にいた友達が俺のブツを踏んでいる方の足をゆっくりと持ち上げて……そして降ろした。

……べちゃら、ぶちょ

原因：友人のささやかなユーモア

3……2…1、ブチっ
「てめぇ！ぶっ殺す！！」四個分の怒り全てを俺はこの友人の責任にして
（八つ当たり？んなもん知っちゃこったねぇ）
１０秒後そこには変わり果てた姿の友人が居た。

学校に着くや否や、俺はひたすらに靴を洗った、ただひたすらに。
その時の俺はただ無心に靴を洗い続けた、それさえしていればさっき起こったことを全て忘れられると思ったからだ。

そして、俺の靴はなんとかそこそこ綺麗になって臭いも消えて無事復活した。

俺は嬉しかった、ほら、世の中辛いことばかりじゃない、たとえ真っ暗なトンネルの中に居たって出口は必ずあるんだ。

そう思った。

そうしてやっと俺は自我を取り戻したのだ。

するとそこには、ドボドボになってしまいとても履ける状態ではなくなった俺の靴があった。
「って、俺はアホな子かぁーー！？」
本日二度目の一人ツッコミが校内に響き渡った。

教室で朝のホームルームが終わると、俺はやっといつもの調子を取り戻しそれ以降は大した事は起こらなかった。

だから、昼休みになる頃にはもう俺は今朝の一連の事件を忘れていた。

と言うよりも脳がフル稼働で忘れさせようとしていた。

だからこそ俺は、悲劇パート2を味わう羽目になったのだ。

昼休みの廊下と言えば、この学校には購買があるというのが関係しているのかどうかは分からないが、とにかく生徒達でごった返す。

それは、ピークの時間帯ならばちょっと前方も見えないくらいだ。

俺も、今日の昼飯は購買でパンを買う予定だったので朝の状態から見事な回復を遂げた友人を誘い、生徒達の波に飛び込んだ。

「くっそ、なかなか前に進めないね」

「ああ、そうだなぁ。後、俺の前でもう二度とその単語を口にしないでくれ」

「え？あぁ、クとソのことか」

などとしょうもない会話をしながら、購買を目指して押し進む。

「押し進む」という表現は別に大袈裟に言っているわけじゃない、なぜならあまりにも混雑しているので前進するためには前方に結構な力をかけながら進まなくてはならないからだ。

「うお！？」

突然、自分にかかる抵抗がなくなり前に体重をかけていた俺は当然、バランスを崩す、しかも両手をポケットに入れていた俺にはもはや打つ手はなかった……

が、しかし、こけてなるものかと力を振り絞り（しぼり）なんと、俺は倒れかけの体勢から右足を前に踏み出すことに成功したのだ

が、しかし、ちょうど右足を下ろした地点にはなんとバナナの皮が……

「イャッホー！！！」

全てを諦めた俺はこの上なく豪快かつ爽快に足を滑らして転んだ。

まさに奇跡だった、今の時代バナナの皮で滑ってコケるなんてお笑い芸人でもしないし、大体バナナの皮が落ちていること自体が普通無い。

廊下は先程まで喧騒に包まれていたはずなのに、今やすっかり静まりかえり周囲の人間からの視線が痛かった。

しかしそんな中で、友人は俺の隣で一人だけ大爆笑していた。

その手にはバナナの中身の部分が握られていた。

3……2…1、ブチブチッ

「てんめぇ！死にさらせぇ！！」

１０秒後には既に原型を留めていない痛々しい姿の友人ｗｉｔｈバナナが居た。

その後パンを無事（？）手に入れた俺は普通に昼食を済まし、午後の授業もサラサラっと（？）終え放課後まで何事もなく過ごした。

俺はこれといって特定の部活には入っていない。と言ってもこの学

校は文化系の部活にも体育系の部活にもあまり力を入れていないらしく、別に俺が珍しいというわけでもない、が、別に帰宅部員が多いわけでもない、つまり部活をやってるやつはやってる、やってないやつはやってないという感じで、まぁ何が言いたいかというとこの学校はあらゆる点で並(なみ)なのである。

部活もやってないし、今日が日直というわけでもない俺は即行(そっこう)で家路についた。

一人で帰っていたつもりがどこからわいたか知らないがいつのまにか１００％完全体な感じに回復した友人ｆｅａｔｕｒｉｎｇバナナ臭がいた。

特に話すこともなくただ歩いていた。

このまま何事もなく家に帰ることができれば、俺は今日一日の呪縛から解き放たれて、明日からはまた平穏な日常を過ごせるだろう、そんなことを考えていた。

しかし、そうは問屋(とんや)が卸す（おろす）はずもなく、不意にとてつもない邪気を感じ取って上を見上げた。

きっと一日中災難続きだったので危険感知能力が研ぎ澄まされていたのだろう、そこにはなんとカラスがいた。

そしてその瞬間、白い何かが見えたのだ！

刹那、俺は思考を張り巡らした。
右にはブロック塀、後ろには怪しい影、前にはご丁寧にも蓋(ふた)が外されている溝、ふっ答えは決まっているぜ
「左だぁ〜！！」

……ぬちゃら、べっちゃら

「っふざけんなぁー！！！」

俺は本日五個目のアレを踏んでしまった、もう名前を口にするのもいやだった。
つーか、怪しい影って何だったんだよ。
とりあえず隣で、もはや拍手をしていた友人ａｎｄトモをぶちのめし、俺は半泣きで家まで走ったのだった。

と、まぁこんな感じで帰宅後も様々な不幸に苛(さいな)まれてしまいその日は俺の人生で最も運が悪い日となったのだ。

……正確にはそうなるはずだったのだ…

一話：今日の朝

ジリッリリッリ…ジリッリリリッ

枕元の目覚まし時計が鳴り出した。電池でも切れかけているのだろうか、ひどく調子外れで不規則なリズムを刻み決して正常とは思えない音がする。

とりあえず布団を上げて、上半身を起こす。眠たくてまだ周囲はぼんやりとしか映ってなく、そんな目をこすりながら時計のスイッチを切る。

携帯電話のメールをチェックしようと携帯を開いた。その瞬間、ふと不吉なものが目に入ってきた。

「A．M．１０時２５分」

そっと布団を掛け直して目蓋（まぶた）を閉じた……

「って現実逃避かよ！！」

いきなり布団を引き剥がされて、誰かと思えば我が弟の友也(ともや)だった。

「おお、このかっこいい兄ちゃんのためにわざわざ起こしに来てくれたのか！」

「兄さん、今日もいつも通りキモイね。」

……ぐさっ、そんなに爽やかな笑顔で、そんなことを、そんなにさらりと朝から言われるなんて（泣）。

「まぁ、冗談はいいとして早く学校いったほうがいいと思うよ、せめて午後の授業だけでも受けてきたら？」

「ほっ、やっぱりさっきのは冗談だったのかやっぱりお前はかわいいなぁ」

「うん、さっきのは冗談だったよ『今日もいつも通り』の部分が、正しくは『今日は群を抜いて』だね。」

…ぐさぐさっ、（くそ、精神的ダメージが大き過ぎて耐えきれない、頑張れ！俺！）

ガチャ、俺が泣きそうなのを必死に我慢していると部屋のドアが開いた。

「友也、さっさとお兄ちゃん起こしてきてって言ったでしょ」

「涼（すず）、そんなこと言ったって仕方ないじゃないか、だって兄さんキモいんだもん。」

「何言ってるの！？」

（さすが我が最愛の妹、涼。友也と違って俺のことを尊敬してるにちがいない）

「お兄ちゃんがキモいのなんていつものことじゃない！」

「ごめん、それもそうだね。すぐに強行手段を取らなかった僕が悪かったよ」

…ぐさぐさぐさぐさっ（駄目だ！心の痛みが許容範囲を越えた、もう立ち直れない）

「「あっ」」

「友也がひどいこと言うから遂にお兄ちゃんが泣いちゃったじゃない」

「涼のせいだろ、僕は加減したほうだよ」

「うっうっ、グスグス」

「仕方ないないな～、ごめん兄さんちょっと言い過ぎたよ」

「うん、お兄ちゃんはそんなにキモくないもん」

「ところで、なんでこんな時間にお前らが家にいるんだ？中学校行かなくていいのか？」

（（立ち直り、早！！））

「え、えーと、最近学校で風邪が流行っててそれで今日は学級閉鎖なの」

「ふ～ん、そうか～」

「っていうか兄さん、学校行かなくていいの？そもそもなんで平日にこんな時間まで寝てたの？」

「そう、それなんだよ！何故（なぜ）か時計が壊れてて時間が遅れてたんだ」

「なんか、お兄ちゃん昨日から災難続きね」

「うっ、そのことは言わないでくれ、人間には誰にでも忘れたい過去というものがあるんだ。」

「何勝手にシリアスな雰囲気作ってるのよ」

友也がちらっと時計のほうに目をやった。

「兄さん、もう11時だよ」

「ヤバっ、さすがにもう休もうかな」

「ふーん、今日の晩御飯いらないんだ。」
「行ってきまーす！」
（（わかりやす！！））

二話：登校後の悲劇（前書き）

更新ペースが尋常じゃなく遅くてすいません（T_T）
ですが頑張って書くので応援、宜しくお願い致しますm（_ _）
m

二話：登校後の悲劇

もう間に合わないどころかとっくに遅刻なのだが、これは遅刻したことに対する罪悪感か何かがはたらいているのだろうか、何故か全力疾走で必死に学校に向かっている俺である。

すると、毎朝友達と待ち合わせている曲がり角に人影が見えた

「どうしたんだよ?、今日はやけに遅かったな。まったく、僕がどれだけ待ったと思ってるんだよ」

なんと、大遅刻にも関わらず俺の小学校からの友達、

田中昌也が待っていてくれた

「それにしても、お前は良い友達を持ったな、こんなに遅刻しても待ってるような友達思いのやつ今の時代じゃ滅多にいないぜ」

「おう、ありがとう！やっぱりお前は俺の最高の親友だ！」

しかし、俺はこの素晴らしき友情に感動している最中、いくつかの不審な点に気付いた

「あれ、お前今日やたら寝癖ひどいな」

慌てて髪を抑えつけながら

「ああ、これ?今日はちょっと新しい自分を演出してみたくなって

な」

よく見ると昌也の顔はかなり窶(やつ)れていた

「それにしても、お前やたら眠そうだな目にスゲー隈(くま)ができてるぞ」

いきなり、極端な猫背にしてポケットに手を入れながら

「ああ、これ？某死のノートの甘い物マニアの真似だよ、賢くなれるかなぁと思って」

ぐ～～～っ、とこれでもか！と言うようなデッカイ腹の音が聞こえた

「スゲー音だな、お前朝ごはん食べてないのか？」

「ああ、これ？これは別に寝坊して時間が無かったからとかじゃなくて、えーと配給制？うちのご飯昨日から配給制で配給キップがないと食べられないんだよ」

「…お前、殴っていいか？」

そんなこんなでボコボコになった、【ただの】友人Aと共に白昼堂々と教室に入って行った

ガラガラガラっ、

「皆、おはよう！」

シーーン

今は保健体育の授業中だった、つまり教室に居るのは、どの学校にでも1人は居るようなコワモテでマッチョでどうでも良いようなことにも怒鳴り散らす、そんな体育の先生のイメージをそのまま具現化したような人物、剛田正一（ごうだまさかず）である。

「お前達は先生をなめてるのか！！」

ドゴッバキッボキッ！

そんなこんなでボコボコになった友人と俺は登校と同時に保健室送りにされたのであった

三話：　ブラックアウト

……う、ううん、なんだか頭がガンガンする、それに視界もボヤけてるし……大体ここはどこだ？

「やっと目を覚ましたか、新庄光夜（しんじょうこうや）。」

うん？ああ、思い出したさっき剛田にボコられたんだった

「それにしても運が悪かったな、てっきりもう目を覚まさないかと思った」

？？、何でだ？
まぁいい取り敢えず状況の確認から行こう、まずここは保健室のベッドの上だ、そしてさっきから話しかけてくるのが馬場二郎（ばばじろう）通称Ｂ．Ｊ先生でここの校医をやっている、うん、ちゃんと記憶はあるし視界もはっきりしてきた。

ところで今何時だ？壁に掛かっている時計を見ると……ｐ．ｍ３時３０分

え～っと俺が学校に着いたのが１１時２５分だから……４時間！！

「田中は当たり所が良かったから１０分くらいで目が覚めたが、まさか４時間も気絶したままになるとは思わなかった、もう少しで外科的処理を施すところだった」

「いや、それはダメでしょう！」

っというか当たり所が良くても１０分間気絶ってあの教師は俺達を殺すつもりだったのか？

「なに、心配には及ばん、私は確かに無免許医だが腕は確かだ」

「尚更ダメでしょう！」

そんなやり取りをしてると
コンコン、とドアが叩く音がした。

「失礼しまーす、掃除に来ました。」
と言っておそらく掃除当番だと思われる3人の女子が入ってきた。

そっか、もうそんな時間かどうりでさっきから廊下が騒がしいわけだ

「あ、なんであんたがここに居るの！？」

よく見たらさっきの3人組の中に我が愛しき彼女、安藤（あんどう）　夏（なつ）がいた。

「おお、まさかお見舞いに来てくれるなんて」

「ひょっとして、4時限目からずっとここに居たの！？」

「ああ、生死をさ迷っていたらしい。」

「ばっっかじゃない！！」

「ひど！！」

最近思う、俺の周りって冷たい奴が多い気がする、ぐすん

「あと、さっきすごく不愉快な感覚がしたんだけど…」

「ああ、気にするな、お前が俺の頭の中で彼女ってことなってるだけだから」

「そうなんだ～、ふ～ん、わかった、わかった」

指をゴキゴキと鳴らしながら、なんか無駄に笑顔で迫ってくる

「え、え～と、何がわかったのでしょうか？」

「光夜がもう2、3時間ほどここに居たいってこと」

と言い終わるやいなや再び俺の意識はブラックアウトしていくのだった。

って、そんなわけにはいかない健全な普通の高校生が1日に2度も意識不明になるなんてあり得ない、あっていい筈(はず)がない、そう自分に言い聞かせて気合いで意識を保った。

「あれ、私の殺人右ストレートをくらっても立っていられるなんて」

「うう、お願いだから普通の女子高生が殺人ストレートとかをあたかも常用語のように口にしないでくれ」

「というか、もう治ったんだったら早く出て行ってくれない？掃除の邪魔だから」

くぅぅ、人を殴っておいて何て言いぐさだ、彼女はやめだ、嫁くらいにしとこう、何て思ってたら

さっきよりも数段凄みをきかせた声で睨み付けながら

「死にたい？」

「あれ～、ひょっとして声に出てたかな～？っと逃げろ！！」と全

速力で廊下に駆け出す。

「あ、待て！」

夏もすぐに廊下に出たがその時には俺はもう遥か彼方、って言うほど距離もなかったが向こうは掃除当番という名の鎖に繋がれいるのでなんとか逃げ切れた、しかもその手には箒が握られていた、どう見ても人を殴るための持ち方で、本気で殺すつもりだったのだろうか……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3954d/

ラッキー♪

2010年12月10日20時25分発行